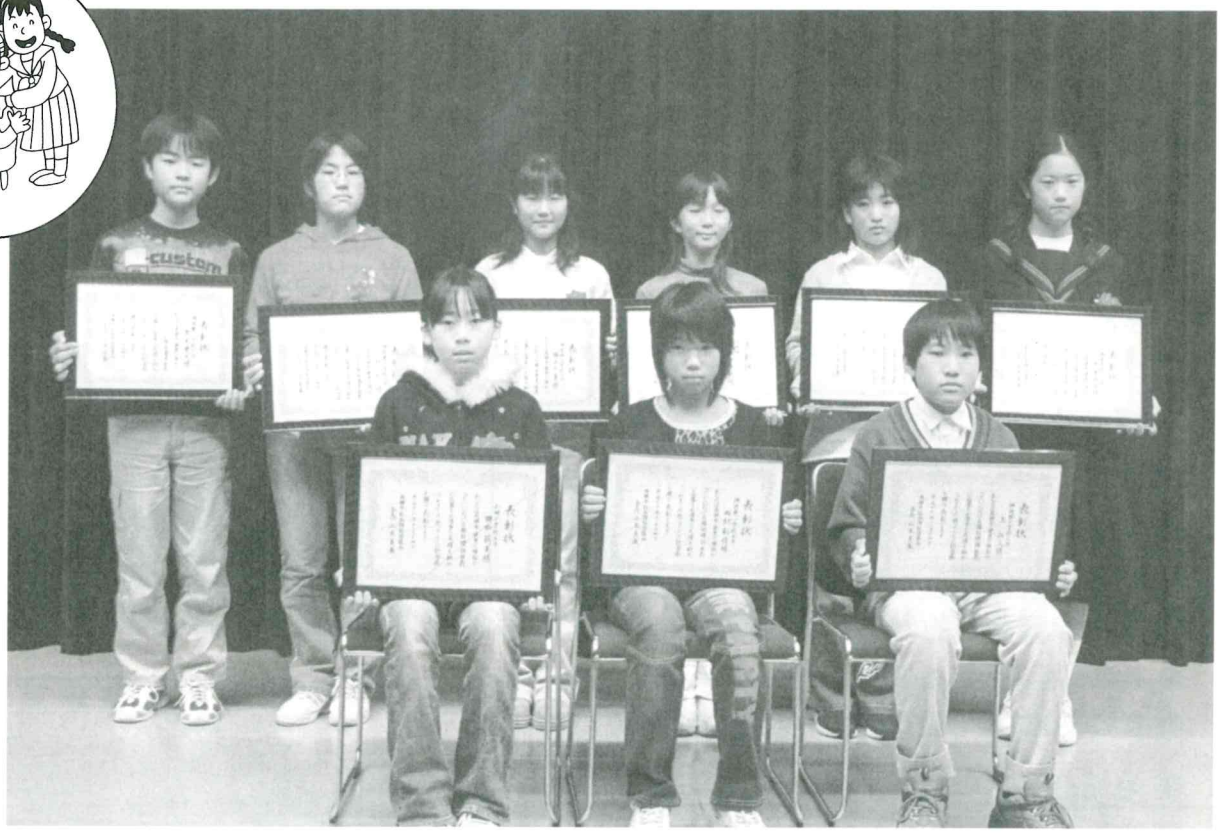
福祉協力校だより

平成17年2月4日発行



飛騨市健康と福祉のつどい：神岡町公民館

福祉のつどい 意見発表

飛騨市福祉のつどい：古川町総合会館

発刊/飛騨市社会福祉協議会　〒509-4221 飛騨市古川町若宮二丁目1番地66号　古川町総合会館内 TEL 0577-73-3214

福祉協力校とは……

飛騨市社会福祉協議会では児童・生徒の福祉への関心を深めるため福祉教育・学習の機会を提供し、体験や交流活動を通して福祉の心を育てる事を目的としています。指定されている１４校では、下記の活動を、本協議会と連携をとりながら活動を実践しています。福祉協力校に指定されると福祉教育の活性化を目的とした助成金が交付されます。

具体的な活動は……

1 広報・啓発活動。

- 講演会や福祉映画会、展示会等の開催。
- 体験作文、学校新聞等の作成や配布。
- 福祉体験意見発表会、活動報告会。
- 学習、研修会。
- 標語の募集。

2 調査・研究活動。

- 児童・生徒に対する福祉・道徳意識調査。
- 地域における福祉実態（施設調査、点字、福祉マップ、一人暮らし老人等）調査。
- 自然環境の調査。

3 体験学習を目的とした実践活動。

- 社会福祉施設等への訪問活動、交流活動。
- 社会福祉体験活動（手話、点字講習会・車イス体験等）

4 地域一般での訪問・交流体験活動。

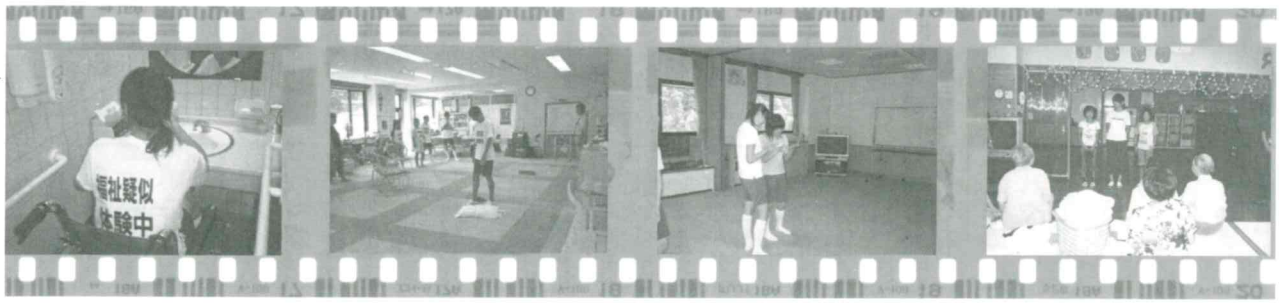
- 老人ホーム等への行事への参加。
- 年賀状・感謝の手紙。
- プレゼント活動。
- 郷土芸能、伝承文化の継承活動。
- 食事サービス。
- 一人暮らし老人等への訪問活動。
- ふるさと、自然体験活動。
- 自然保護活動。
- 交通安全・火の用心活動。

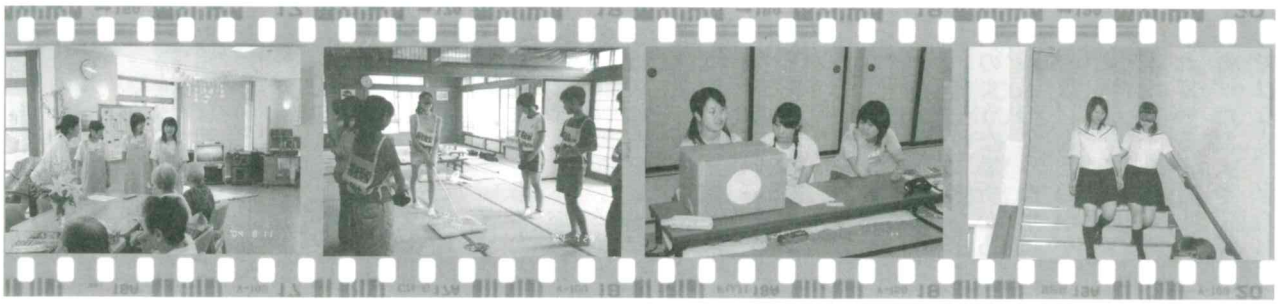
福祉協力校一覧（14校）

・飛騨市立山田小学校・飛騨市立山之村小中学校・飛騨市立神岡東小学校・飛騨市立神岡西小学校
・飛騨市立神岡中学校・岐阜県立飛騨神岡高等学校
・飛騨市立古川小学校・飛騨市立古川西小学校・飛騨市立古川中学校・岐阜県立吉城高等学校
・飛騨市立河合小学校・飛騨市立河合中学校
・飛騨市立宮川小学校・飛騨市立宮川中学校

福祉体験

ワークキャンプとは、夏休みを利用して１日目は、車イス体験、視覚体験、聴覚体験をし、２日目は福祉施設での福祉体験を行います。給食サービスとは、土曜日、夏休み、冬休みを利用して、調理ボランティアの方と一緒にお弁当を作り、配達ボランティアの方と一人暮らし老人の方や高齢の老夫婦の方にお弁当を届ける活動です。福祉体験事業の写真を掲載させていただきました。





平成十六年十一月十四日（日）神岡町公民館において、「飛騨市健康と福祉のつどい」、が又、十二月十二日（日）には、古川町総合会館において、「飛騨市福祉のつどい」を開催し、福祉協力校の小・中学生による意見、標語の発表をしていただきました。今回、特集号として福祉についての素直な意見発表をまとめて掲載しております。尚、標語につきましては、短冊により全戸配布を、また広報「ひだ」の十二月号と一月号にも掲載をしてありますので、ご愛読下さい。

ワークキャンプに参加して

神岡東小学校六年
黒木　康太

ぼくは、夏休みの二日間、ワークキャンプに参加しました。そこで僕は、二つのことを学びました。

まず、一つ目は、障害のある方の気持ちを分かることができたという事です。ワークキャンプ一日目、僕たちは、目の見えない人や耳の聞こえない人、足が動かない人、そして、お年寄りの方たちの、体が自由に動かない、つらさを、いろいろな道具を使って体験しました。とても大変でした。でも、障害のある方や、お年寄りの方たちは、この想像以上に大変だった体験を、一生背負って生きているんだなぁと思いました。すると、障害のある方やお年寄りの方の気持ちがよく分かってきました。

もうひとつは、おじいさん、おばあさんとたくさん交流できたことです。　五年生の時に、自分たちで計画していったケアホスピタル高原では、自分から関わりを持つことが出来ず、何ができるのか見つけられなかったので、次のたんぽぽ苑訪問の日。たんぽぽ苑に入って、中を一通り回ったとき、たくさんのおじいさん、おばあさんがいらっしゃいました。ベッドに寝たまま動かない人、隣の人とおしゃべりしている人、ゆっくりと車椅子を手で押して歩く人、いろいろな状態の方が生活していることが分かりました。

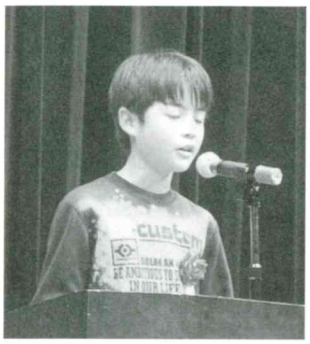
午前中は、縫い物をしているおばあさんと交流する時間がありました。でも、緊張してしまって、何も話せませんでした。そのとき、自分は勇気がないなぁ、と少し落ち込んでしまいました。

そして、昼食の時間がきました。食事の様子を見ていると、自分でご飯が食べられず、食べさせてもらっている人がいました。僕は、何をしていいのか分からずにその様子を見ていたら、たんぽぽ苑の方や先生にすすめられ、食事介助を経験できることになりました。食事介助は初めてで、口に運ぶ量が多すぎたり、タイミングが分からなかったりしました。それでも、口に入れやすいように小さくまとめたり、「次は、豆腐を食べましょうか」と声をかけながら介助していると、おばあさんがにこっとうれしそうに笑ってくれました。僕はうれしくなって、だんだん勇気が出てきました。

午後の交流の時間では、ゲームやお茶会の手伝いを通して、自分からも話し掛けられるようになっていきました。ほんの少し、勇気を出して話しかけたり、お話しを聞いたりすることでとても喜んでくださいました。

僕は、ほとんどのことは自分で出来るけれど、体が自由に動かない人は、出来ないことがたくさんあること、そういった方に喜んでもらうために出せる勇気が僕にあることが、このワークキャンプに参加して分かりました。

今回の経験を生かして、車椅子を押してあげたり、お年寄りの方に声をかけたりしたいと思います。また、体が不自由な人だけでなく、困っている人がいたら、恥ずかしがらずに、勇気を出して、手助けしていきたいです。



福祉の体験

神岡東小学校六年
林　彩乃

私は、福祉体験のひとつとして、たんぽぽ苑を訪問してきました。そのとき感じたことを話したいと思います。

一つ目はたんぽぽ苑の施設・設備についてです。

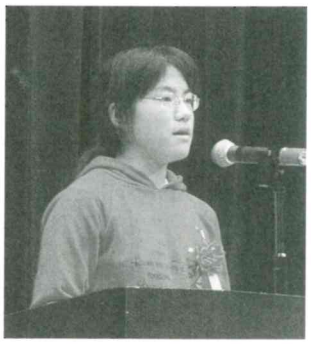
たんぽぽ苑には、私の周りで使われているものと違ったものがたくさんありました。お風呂場を見せてもらったときに、寝たまま入れるお風呂や、車椅子に乗っている人が座ったまま入れるお風呂などがありました。その人の体の状態にあわせて、一番入りやすくて、気持ちがいいと思えるような工夫がされていました。

また、もうひとつお風呂場があり、そこのお風呂には、自分の力で歩ける方が入るための銭湯のような場所がありました。銭湯のような形になっているのは、人とのかかわりを大切に考え、みんなで楽しく会話しながら入れるように工夫されているんだろうと思いました。ただ入って汗を流すだけではなく、私たちと

同じように、気持ちよく、楽しく入れるようにという願いがあるように感じました。

二つ目は、たんぽぽ苑で働いている方についてです。廊下を歩いている時、食事介助の時、お茶会の時、どんなときも名前を呼んで、ニコニコと話しかけてみえました。私は当たり前のようにおじいさん、おばあさんと呼んでいたけれど、名前を呼んで明るく話しかけている姿を見て、一人ひとりを大切に考えている、そんな感じがしました。

昼食のとき、ポロポロと口からこぼしている方や、自分では食べられない方がいました。私は、こぼしていることが気になって、どうお手伝いしたらいいのか分かりませんでした。でも、介助をしている方は、食べ物をこぼすという小さなことだけに目をやらず、楽しく気持ちよく食べられることを大切にして声をかけたり、一口の量を少なくしていることに気がつきました。出来ること、出来ないことがあるけれど、出来ることに目をやり、その人の身になって、にこにこと手助けする姿勢はとても勉強になりました。



自分にも出来ることはないだろうかと思いながら食事の様子を見ていると、決まった皿だけ食べているおばあさんがいました。私は、皿の場所を入れ替えて、「どうぞ」と話しかけてみました。そうしたら、そのおかずを食べ、「ありがとう」と答えてくださったので、うれしくなりました。

以前、訪問したときには、紙芝居の読み聞かせをして、一時的に喜んでもらうことしか出来なかったけれど、今回、日常生活に密着した食事介助ができたことは、とても貴重な経験になりました。もしも将来、身近な人に食事介助が必要になったときには、今回学んだことを生かして、楽しい食事が出来るようなお手伝いをしたいと思います。また、体が不自由な方も、私たちと同じように幸せに楽しく暮らせるように、自分から声をかけて、喜んでもらえることをしていきたいと思います。

心を近づけて

神岡西小学校六年　横山　千夏

私の好きなじんすけ君は二年生。自閉症でひまわり学級にいます。じんすけ君は、みんなと一緒に勉強することができません。なぜかというと、先生や友達とコミニュケーションをとることが難しいからです。じんすけ君は、私たちが何回声をかけても、なかなかしゃべってくれません。時には、遊ぼうと思っても、逃げていってしまいます。

私は六年生になって、ひまわり学級と交流するまで、じんすけ君は、先生の助けがないと何にもできない子と思っていました。でも、交流が始まり、何回も遊ぶと、じんすけ君のできることがたくさん見えてきました。

算数の授業では、じんすけ君がはじめのあいさつをする時、「気をつけ」と言う声でピシッと手を横にして、しっかり立ちました。「はじめます」と、きちんとあいさつしていました。たし算の計算もできます。じっとしていることが苦手なはずなのに、一生懸命勉強していました。

時には、六年生の名札を見て、名前を読むことがあります。漢字も読めるのです。私は、じんすけ君のことを、何も知らなかっただけなのだと驚きました。

十一月になって、私自身は、もう、じんすけ君とはとても仲良しだと思っていました。「おはよう」と言えば、「おはよう」と返してくれるようになっていたし、ずい分たくさん遊んでいたつもりだったからです。「心が近づいている」そう思っていました。

ある日、じんすけ君が、一人でひまわり学級の健康板を保健室へもっていった時のことです。教室から保健室まで、わずか二十メートル。私なら十秒もあれば行って帰ってこられる距離です。じんすけ君は、寄り道をたくさんしてしまい、なかなか教室へ帰りませんでした。私は、じんすけ君に「じん君、行こう」と声をかけてみました。じんすけ君は、私のことなど気にもせず、遊び続けてしまい困ってしまいました。どうしたらいいのか戸惑っていると、教室から、じんすけ君の担任の稲田先生の声がしました。「じん君、教室、もどって」すると、突然、じんすけ君は反応し、教室へ向かって走り出しました。正直、とてもショックでした。なぜ、私の言うことは聞いてくれないのだろう。

よく考えてみると、稲田先生とじんすけ君は、私が思っているよりも、深く、心が近づいていたんではないかと思いました。稲田先生と、もう一人の担任、本田先生のすごいところは、じんすけ君の気持ちになって、わかるように、短い言葉で声をかけ、カードをつくったり、教室の立つ場所にテープを貼ったりして、じんすけ君が一人でできるような工夫をしているところです。そして、じんすけ君のそばにいて、いつもニコニコ笑っています。じんすけ君のためにどうしたらよいか、いつも考えています。心が通い合っているから、稲田先生や本田先生の声に反応するのだと

思いました。

相手のことを理解して、同じ気持ちになって行動することが大切なんだと、稲田先生や本田先生の姿から学びました。自分がわかろうとしなければ、行動には移せないし、心が近くなることはできないと思います。

じんすけ君が笑ってくれると、心が和みます。じんすけ君がしゃべってくれるとうれしくなります。じんすけ君のにこーっと笑った顔で、心があったかくなります。

あと、半年しか、じんすけ君と同じ学校にいることはできませんが、じんすけ君が、わたしの言ったことを、少しでもわかってくれるよう、いっぱい遊んで、声をかけていきたいと思います。そして、もっともっと、じん君に心を近づけていきたいと思います。

夢に向かって

神岡西小学校六年
坂田　奈美

「ありがとな。」「また来てな。」

おおばあちゃんが言ってくれたこの言葉が今も私の心の中に残っています。

私には百三歳まで生きたおおばあちゃんがいました。亡くなる前、おおばあちゃんの所へ行って本を読んだり話し相手になったりしていました。そのときおおばあちゃんはニコニコしながら笑顔で喜んでくれました。私はとても嬉しかったし、また来て話そうと思いました。私はこの言葉に、勇気をもらいました。こうして私は将来介護にたずさわる仕事につきたいと思うようになったのです。

私の将来の夢は、介護福祉士です。そこで今年の夏休みに「福祉ワークキャンプ」に申し込みをしました。

八月七日、旭が丘ディサービスセンターでお年寄りの方と接することになりました。センターには、目の不自由な人、足の不自由な人などいろいろな人がみえました。

施設に入った途端、介護士の方が私に「おばあちゃんたちとお話してあげて」と言われました。突然なことで私はどうしていいか分からず戸惑いました。お話をしてと言われても、何を話せばいいの？どんな話がおばあちゃんは楽しいの？とあれこれ考えました。ぼーっとしている私を見ておばあちゃんの一人が声を掛けてくださったのです。「どこから来たのな？」私はドキッとしました。おばあちゃんは私が緊張しているのに気づいてくれたのでしょうか。私はその質問にあわてて答えました。しかし、おばあちゃんには私の声は届いていなかったらしく、えっ？と聞き返されました。ただ聞き返されただけなのに、再び答えることが何だか恥ずかしくなりました。「あれっなんで聞こえないのだろう？ちゃんと話したのに。」これまで私は、学校の授業やテレビを見て、お年寄りのことや、体の不自由な方の気持ちを理解しているつもりでした。だから、介護の仕事だって私にも簡単にできるものだと思っていました。しかし、現実は違いました。耳が遠いおばあちゃんに、私は友だちと話すように受け答えをしていたのです。

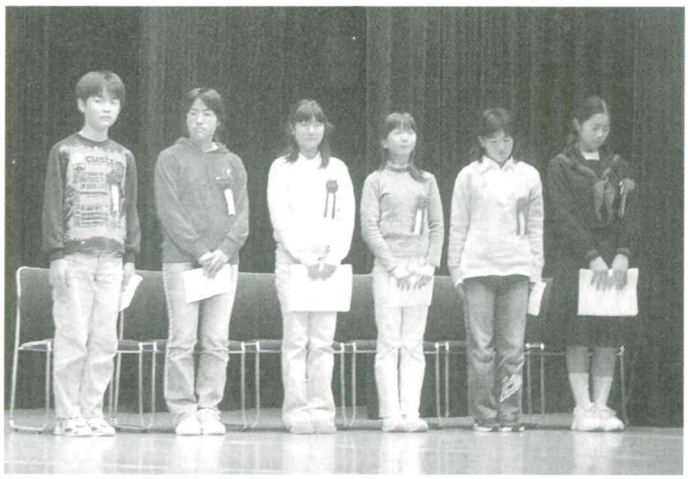
当たり前にできると思っていた、お年寄りの方との接し方一つが、当たり前じゃなかったことに気づきました。介護士さんの仕事が、とてつもなく難しいものに感じてしまいました。

その時、近くにみえた介護士さんの姿が目にとまりました。介護士さんは、腰をかがめて、おばあちゃんの耳もとに口を近づけ、明るい笑顔で話をしていました。話をしているおばあちゃんも楽しそうでした。耳が不自由な人にはそれに合わせた接し方をして見えたのです。その姿がとっても自然に見え、かっこいいなぁと思いました。

「介護士さんの、常にお年寄りの立場に立って考えて働く姿と、やさしさや明るさがお年寄りを元気づけているんだな。」

ここで過ごしてみえるおばあちゃんたちが、こんなに生き生きと明るく生活してみえるわけが分かったような気がしました。

これからはいろいろな勉強だけではなく、普段の生活で友だちと過ごすときも〝相手のことを考えて話をしたり、困っている人がいたらやさしく声をかけたり、まわりの人を明るくしたり〟できるようになり、私の夢「介護福祉士」になりたいと思っています。



ワークキャンプの体験を通して

山田小学校六年
稲城　志歩

私のお母さんは、老人ホームのたんぽぽえんで働いています。それに、私のひいおば

あちゃんは、わたしが三さいのころからたんぽぽえんでくらしています。そのため、たんぽぽえんにはよく行きます。

この前、お父さんとたんぽぽえんに行った時、お母さんがお年寄りをお風呂に入れて、帰っていくところでした。たまに、お風呂に入るのが嫌いな人を入れた時に、うでをひっかかれたりするそうです。それで、その部分が水ぶくれになったりすることがあります。

私は、その時は、そこまでしてどうしてやらなければならないのだろうと思いました。他の介護士の人は、お年寄りのつめを切ってあげたり、ご飯を食べさせてあげたりしていました。

私は、今年の夏休みに、ワークキャンプという福祉の体験学習をしました。最初は、たんぽぽえんの施設を見学しました。たんぽぽえんには、何度も行っているので大体のことは知っていましたが、飛騨市民病院へつながる道をみせていただいたときには、とてもびっくりしました。お母さんから話には聞いていましたが、あんなに大きくて広いとは思いませんでした。大きなベッドのまま移動することができ、早くお医者さんにみてもらえるようになっているのだと思いました。

次に、シニア体験をしました。体の関節におもりをつけ、目にはアイマスク、耳には耳栓をつけて歩きました。歩くにもひざがしっかり曲がらないので、とても歩きづらかったです。椅子にすわったり、階段をおりたりする時には、ひざが曲がらずとても苦労しました。

目が不自由だと、近くのものでさえ見づらく、小さな音は、何もきこえないのでとても不安です。私は、この体験を通し、お年寄りの方のつらさがわかったような気がしました。

次は、食事の介助でした。私は、お母さんから、「お年寄りの方としゃべるときには、お年寄りの目の高さに合わせて大きな声で話すんやよ。」と言われたことを思い出しました。

そこで、あるおばあちゃんに、大きな声で、「食事を片付けていいですか。」と声を掛けました。でも、返事が返ってこなかったので、皿を片付けていいのか分からず困りました。でも、もう一度、お年寄りの目の高さに合わせて声を掛けてみました。すると、おばあちゃんは、笑顔でうなずいてしゃべってくれました。このおばあちゃんの笑顔を見たときに、何となくお母さんの気持ちがわかったように思いました。

私は、この体験を通し、介護の難しさや大切さを勉強しました。また、お年寄りの立場に立って考えることもできました。

山田では、地域のお年寄りの方とふれあう機会がたくさんあります。今年だけでも、昔の食事や遊びについての話を聞いたり、一緒にお菓子を作ったり、グランドゴルフをしたりして、とても楽しい時間を過ごしました。朝、学校へ行くときには、お年寄りの方にあいさつをすると笑顔であいさつを返してくれるので、とてもうれしいです。この方たちも、もっと年をとったら介助が必要となるかもしれません。

私は、将来、介護士になりたいと思っています。お母さんがこの仕事についたことがきっかけですが、今まで一生けん命働き、たくさんのことを教えてくださるお年寄りの方のために何か役にたちたいと思うからです。

中学校へ行ったら、これまでのようなお年寄りの方との交流はなくなると思いますが、中学や高校での体験学習に進んで参加し、ワークキャンプのときのことを生かして、介護士の夢に一歩ずつ近づいていきたいです。

障害をもつ人について考えたこと

山之村小学校五年
岩本　拓馬

僕が障害をもつ人の生活について考えるようになったのは、四年生の時からです。

四年生の国語の授業と、今年の全校道徳の「福祉について考えよう」という時間に、点字について勉強しました。その時、神岡に住んでいらっしゃる石橋さんという方に来ていただいて、点字の打ち方について教えてもらうのと同時に、視覚障害をもっている人の生活についても話してもらいました。

ぼくは話を聞きながら、視覚障害をもっている人はどうして目が見えなくなったのかが気になりました。石橋さんに聞いてみたら、病気や事故、生まれたときからなどいろいろな理由があると教えてくださいました。

視覚障害をもつ人の中で、病気や事故で目が見えていたのに見えなくなった人達は、そのときどう思ったのでしょう。

もし、ぼくだったら、好きなマンガやテレビが見られなくなるし、スポーツをしたり友達と自由に遊ぶこともできなくなるから「毎日面白くない」と考えてしまうと思いました。

でも、目の不自由な人達が、ぼくたちと同じで、普通に生活したり、スポーツをしたりしているということも聞いたとき、「今のぼくにはできないことだなあ」と思いました。

視覚障害のある人の生活の話を聞いたあと、点字の打ち方を教えてもらいました。

器具を使って点字をうつことは、目の見える僕にとっては表にあるようにうてばいい

ので簡単でしたが、指先で読もうと思っても、どんなふうにうってあるのかさっぱり分かりませんでした。でも、普段点字を使っている人達は指でさわるだけでスラスラ読むことができるんだよと教えてもらいました。

　石橋さんからは、視覚障害をもっている人が生活する中で、どんなことでも困っているかと言うことも教えてもらいました。道路にある点字ブロックの上に自転車が置いてあることで、それをよけるために怖い思いをすることや、ブロックがあっても、大きなトラックの荷台は高くて後ろにつきだしていることもあるのでそこで頭をぶつけてけがをすることがあるとか・・・・・

　この話を聞きながら、ぼくは四年生のときに、身体障害者の体験をしたことを思い出しました。いろいろな体験をしたことをよく覚えています。

　補助の人がついて、声をかけて歩く場所を教えてくれます。安全な学校の中なのですが、ぼくは、「ここに入り口があったはずなのに」「ここにはこれがあったはずなのに」という不安や、怖さでいっぱいになり、なかなか歩くことができませんでした。

　このような体験をしたり、石橋さんの話を聞いていくことでぼくは、視覚障害をもつ人達は、生活の中で、歩くことにしても、つえで歩く訓練をしたり、字を読むことでは点字のことを沢山勉強したりしています。特に途中から目の見えなくなった人はすごく努力をしていると思います。さらにスポーツなどにも取り組んで楽しい生活になるようにがんばっている人もみえるそうです。

　障害をもつ人達は、一日一日をとても大切にしているんだなあと感じました。

　これからの社会は、みんなが少しずつ優しい気持ちをもつことで、障害のある人が安心して生活できるような社会になるといいと思います。「ぼくには何ができるのだろう？」と考えはじめました。

　するといいことは、きっとたくさんあるのだと思いますが、まずは、ぼくが不自由をしている人を見かけたら、勇気を出して「何か手伝えることはないですか」と聞いたり、障害者用の駐車場に車を止めようとしている人がいたら注意することからはじめたいと思います。

　そして、ぼくも、毎日を大切にしていきたいと思います。

福祉について思うこと

神岡中学校一年　中島　祐佳

　私が中学生になった今年の春に、高齢化社会について勉強し、高齢になった時の生活、動作を体験する授業があり、本物に近づけるために、目が見えにくくなるゴーグルや、ゴムを体の線に合わせてきつく、つなげた物などを身につけて、歩いてみる体験をしました。体験ではひくい階段を上ったり、段差の所で手をひいてもらったりして歩きました。最初はなんだか気恥ずかしい思いもありました。

　しかし、いざ歩いてみると、すぐに転びそうになってひやりとしました。小さな段差やただの階段を上っていくだけでも怖く、終わったときは少しほっとしました。体験をしている時、一番初めに思ったのは、こんな生活したくない、と言う事でしたが、少し考えてみると普段私の周りにもこういう生活をしている人がたくさんいて、その大変さが、見ているだけではわからないと言う事に気づきました。

　視力や筋力が落ち段差などにつまずきやすくなっている高齢者の人達は、何かの拍子につまずいてしまったら持ちこたえられずそのまま転んでしまうのです。普段気にも留めないような小さな障害が、へたをすると命取りになってしまうのです。階段はもちろん、曲がりにくくなる手足では、上り坂はとても辛いと思います。

　次に思ったのは、日常生活への支障です。普通に掃除や洗濯だけでなく、食事をしたり、風呂に入ったりする事さえ一人では困難になってきます。私たちが当たり前にしているような事ですら、高齢になる程に難しくなってきてしまうのです。また、養護施設のたんぽぽ苑へも行きました。そこは、内装は真っ白で、中はテレビの音しか聞こえないような、とても静かな所です。入り口の所の賑やかな飾り以外は同じような形の病室が何個もあって、中にベッドが二つ程ずつ並んでいます。確かに人は居るのですが、会話もほとんど聞こえません。お見舞いにきた人を見かけてもしゃべっていないか、どちらかが、一方的にしゃべっているように思え、楽しげな会話・・・と言う感じではありません。そのときは沢山のクラスメイトと一緒でさわがしかったけれど、前に大ばあちゃんのお見舞いに行った時は、人が居るはずなのに音があまり聞こえなくて奇妙でした。

　たんぽぽ苑での出来事で、とても良く覚えている事が一つあります。小学三年生くらいのとき、おばちゃんと一緒に、大ばあちゃんのお見舞いに行きました。おばあちゃんが車椅子を押している間、私は椅子に座って待っていたら、急に話しかけられました。知らないおじいさんが、非常口のドアの前に立って、私の目を見て「開けてくれ」と言いました。驚いたのと怖かったのとで何も言えず、怖い声でもなかったのに私は立ちす

くんでいました。おじいさんはもう一回、同じ言葉を繰り返しました。やっとの事で「だめです」と小さな声で言えたけど、聞こえなかったのか、今度は「家に帰るから開けてくれ」といわれました。それを言われて痴呆症の人なのかなと思って、とっさに「家は何処ですか?」と聞き返したのを覚えています。急にそのおじいさんがかわいそうになったのかもしれないし、駄目だと追い返すのが怖かったからかもしれません。そうしたら、おじいさんは急に色々しゃべりだして、すごく怖くなりました。それでなにも出来ないまま立っていたら、おばあちゃんが戻って来てくれました。そうすると、そのおじいさんは、今度はおばあちゃんに「開けてくれ」と言い、それをすんなりおばあちゃんは、なだめて職員さんの所に連れて行きました。ほっとはしたけれど、それからは、ずっとおばあちゃんから離れられませんでした。あのときは怖くてしょうがなかったけれど、今改めて考えてみると、私に開けてほしいとたのんだのだろうと思います。

たんぽぽ苑の二階は老人性痴呆症の人も多く、通路や階段には檻があって、出入り口のドアには鍵がかかっていました。しかし、それは苑から出ては危険なので、そのようにしてあるのです。老人性痴呆症の人と話すと昔の事を同じ内容で延々と話します。

あのおじいさんは出られない外を見て、昔の事を思い出していたのでしょうか。住み慣れていた家に帰りたくても、自分では何も出来ず、近くに居た私に助けを求めたのでしょうか。手伝いは出来ないと、私はわかっていても、「駄目だよ」ときっぱり一言、言えなかったのは、私の何処かにお年寄りを哀れむ気持ちがあったからでしょうか。何も分からなくて、かわいそう・・・と。しかし、今はそうは思いません。あのおじいさんの心の中にはどんな思いがあったのでしょう。何も分からないからでは無く、沢山の思いがあったからこそ家に帰るという行動を起こしたに違いありません。長い人生を生き抜いて来た人だからこそ色々な思いがあふれでてきているのでしょう。

福祉施設とは、社会的弱者を支援し、社会全体の幸福を目指す施設だと言います。

昔に比べて今は、ずいぶんとそれも整備されてきたのでしょうが、やはりまだ、施設・運営、管理だけでは手一杯な面もあるようです。高齢になるとどうしても、周囲の環境は変わり、人や社会とのコミュニケーションが上手く取れなくなる事も多々あるように思われます。家の中で一人過ごす人も多く、人とのかかわりも薄くなってしまいます。

痴呆は、周囲との会話が少なくなったり、脳を使う事が減ったりすると進行すると聞いたことがあります。たんぽぽ苑のような施設の充実と共に、家族や他人とのふれあいや交流を積極的持つようにすることで、少しでも老いることを食い止めることができるのではないでしょうか。長い年月を精一杯、頑張って生きてきたお年寄りは、経験や知識を沢山持っていて、社会にとって、とても大切な存在だと思います。

私自身、おじいちゃんやおばあちゃんはとても大切な存在で、沢山のことを教わってきたように思います。

お年寄り一人一人の生きてきた環境や思いを知り、その人が一番望んでいる老後を送るためのサポートが柔軟に出来る。そういう社会を私たち若者が作っていかなければならないのだと感じています。

福祉体験で感じたこと

神岡中学校三年
川上　由奈

私はこの夏休み中にとても良い体験をさせていただきました。おじいちゃんやおばあちゃんとお話をしたり、一緒に楽しんだりする事ができてとてもうれしかったからです。いっしょうけんめいに私に話してくれたりして、ゆったりとしたおじいちゃんやおばあちゃんの気持ちが伝わり、私自身もゆったりとなごやかな気持ちになりました。

ここで働いている方々は、本当に心から笑い話されていたので福祉というお年寄りの方々とのふれ合いがとても好きな方ばかりなのだと思い、私も将来、福祉の道へ進めたらと思いました。しかし大変な事もあるのだと体験を通して感じました。それは食事です。食べられる方もいましたが、あまり食べない方もいました。そんな時、話をして少しでも良いから食べようという気持ちになってもらおうとする事が大切だと分かり、それは私にできるのかなあって思い、不安にもなりました。

お年寄りの方々は、痴呆症や老眼などという老人病になり、とても、気をつねにつかい、危険なめに合わないようにするのも大切なことです。しかし私がとくに大切だと思ったのは、コミュニケーションです。どんな人でも一人でボーッとしているのはつまら

ない事だし、話したりする事で気持ちがおちついたり、楽しいと思う事があります。お年寄りの方をお年寄りだから自分とは違うといった考えは、間違っていると思います。楽しい事やうれしい事は一緒に喜ぶ事ができるし、不安な事や悲しい事は話を聞いて良いことに変えたりできます。だから特別なんかじゃないと体験を通して感じる事ができました。それを感じられた事で一歩将来へ近づけました。このような体験があったら、またさせていただきたいと思います。

ワークキャンプに参加して

古川小学校六年　川合　雅司

ぼくは、昨年に引き続き今年も、夏休みにワークキャンプに参加しました。

今年は、総合会館の和室で座って、手だけでボールをたたいて、足の不自由な人と、同じ体験をしました。次に、車イスでスロープの所と段差の所を通ってみました。日頃、何でもないことが、足が不自由だととても大変だし、車イスも手で押すのに、すごく力がいるなぁと感じました。

和光園には次の日に行きました。和光園では今年も部屋の掃除とふれあい活動がありました。部屋掃除をしていると、元気な方、足が弱っている方等いろいろなお年寄りの方が、小学生のこの僕に「お願いします。」というのです。だから僕は、とてもいい気持ちで、たなやゆかをふいたり、はいたり、掃除機をかけたりしました。そして、掃除が終わると、今度は「ありがとうございました。」といってくれるのです。どの部屋に行ってもそうです。ぼくは、なんだか、すごくうれしい気持ちになり、もっと掃除をしてあげたい気持ちになりました。ふれあう時間では、昨年もいろいろ話をしてくださった和田さんと話しをしました。和田さんは、体が小さくて、かしこそうで元気で、いろんな事をしっているおばあさんです。戦争の話では、食べ物の事、どんな所に住んでいたとか、家族の事では、兄弟は、七人で多ぜいいた事などを話してくださいました。最後には和田さんは、「親は、神様よりも偉い。神様よりも偉いから親のいうことは、ちゃんと聞くんやよ。」と、僕に教えてくれました。

和田さんと話していると、なんだかゆったりとした気持ちになり、和田さんの言うことなら何でも聞ける気がしました。ぼくのことを大事にしているんだなぁと思いました。和田さんはいつまでも元気でいてほしいと思いました。

今年は、和光園だけでなく、さくらの郷やデイサービスにも参加して、挨拶やお礼はきちんと返すのが当たり前。挨拶やお礼は気持ちを込めて、心からすること。親を大切にすること。相手を大事にすれば、自分も大事にさせるということ。など多くのことを学ぶことができました。ぼくは、お年寄りを大切にしたいと思いました。そして、これからは、和光園のお年寄りとも声をかけたり、話をしたりして大切にしていきたいと思いました。

給食サービスから学んだこと

古川小学校六年　古田　朱花奈

私は、夏休みに給食サービスに行きました。

給食サービスとは、独居老人の方にお昼を作って届けるボランティア活動のことです。

古川西小学校の人と一緒にみんなで協力してお弁当を作りました。私は、お汁に入れる豆腐を切ったり、花ふを水に浸したりしました。普段、家では母の手伝いをしていたので切ったりするのは慣れていて簡単にできました。けれど、盛りつけになったら、入れる場所が決まっていて、入れるところを間違えたり、こぼしてしまったりして、周りに迷惑をたくさんかけてしまいました。このことで、盛りつけ一つに気配りが必要だと感じました。そのあと、やることがないかどうしていいかわからず、うろうろしていると、ふと、気づいたことがありました。

「わりばし」のケースです。ふつうは、お手元など書いてある縦に長いケースが、千代紙のような和風の折り紙で「つる」の形に折ってありました。見るからにお年寄りが気に入りそうです。食欲もでてきそうです。

私は、こんな所にまでお年寄りのために気をつかっているのにはびっくりしました。お弁当を作るにも心をこめて細かい所まで目を通してお年寄りのために、お年寄りの気持ちを考えているのはすごい

と思いました。
お弁当は、おいしそうにできあがっていました。
配達の時間です。
私は最初の説明で、「お弁当を配達する時は、大きな声で挨拶をして声をかけてあげてください。」と、いわれたことを心がけておこうと思いました。
配達は、ボランテイアの方達の車で分担された地域まで行きます。私は、上町方面に西小の人とペアで向かいました。最初は緊張していて声が出なくてどうしようと心配しました。でも、だんだん慣れてきて、声もでるようになり運転してくださっている方とも話しをしました。お年寄りの方には挨拶の後に「毎日暑くて大変ですが、体に気をつけてください。」や、「お弁当を持ってきました。残ったら冷蔵庫に入れてください。」と、大きな声で声をかけました。お年寄りの方は、子供がきてくれるのがとてもうれしいのだそうです。とても、にこにこしてお弁当を受け取ってくださいました。
中には、お弁当が運ばれてくるのを楽しみにしていて、玄関で待っている方も見えました。このような笑顔を見たら、私までうれしい気持ちになり、まだ他にも何かしてあげたい、お年寄りを大切にしたい、という気持ちになりました。
私は、給食サービスを通して、思いやりの心や優しさの大切さを学んだような気がしました。この気持ちを大切にして生活していきたいと思います。

福祉活動について

古川西小学校六年
山口　郁美

私は、福祉活動にとっても興味を持っています。そんな思いになったのは、四年生のころからです。四年生の時、私はボランテイアクラブに入っていました。私は、クラブの時間をとても楽しみにしていました。何回目かのクラブの中で、「みんなでハートピアに、劇をしに行こう」ということが決まりました。その時私は、ただお年寄りに見せて終わりという程度に思っていました。練習が初まった時も、私は、練習がいやだとか、めんどうだとか思ってやっていました。そんな思いのままで当日を向かえた私でしたが、やっぱり劇を見せにいくのはいやでした。劇が始まる直前、私はお年寄りの方々の笑顔を見ました。みんな私達の劇をとても楽しみにまっていてくださったんだと思いました。その時、「心をこめて劇をしよう」という思いが、わいてきました。劇が終わると、お年寄りの人は、私達にとても大きな、はく手をしてくださいました。その時、とてもうれしくて、私達のかおもいっぱい笑っていました。
「上手やったよ」「また来てな」の声をかけてくださいました。福祉とは、みんなの顔を笑顔にしてみんなの心をやさしくするとてもすばらしい事なんだとその時思ったのです。それから私は学校でしょう介されるほとんどの活動に参加をしました。
五年生の冬、一人で住んでいるお年寄りの人のために、お弁当を作り、宅配する「給食サービス」の活動に参加しました。一件目、家のげんかんで、「こんにちは」というと、「ハーイ」とお年寄りの人の元気な声がきこえて来ました。「最近は、寒いので、体に気をつけてください」と言うと「ありがとう」とニッコリとして私に言ってくださいました。その日は、とても寒い日だったけれど、何だか、とてもあたたかくなったことを覚えています。六年生になって目の見えない人、足の動かない人、耳の聞こえない人の体験をしました。障害を持ってみえる人達は、すごく大変な思いをして毎日の生活をおくってみえるのだということがよく分かりました。お年寄りの人や、障害者の人には、その人の気持ちになって、とくにやさしくしなくては、その時思いました。又、六年生の総合的な学習の時間、私は、ハートピアへ福祉体験をさせていただきに行きました。お年寄りの気持ちになり、心をこめてお世話をしました。いつもよりずっとやさしい言葉づかいで接している自分に気付きました。その時、私はふと思ったのです。福祉活動は、人の気持ちを動かすことが出来るということを・・・・。
又、私は、以前、道徳の時間に、星野富広さんという人の事を知りました。その人は、事故に合い首から下が、まったく動かなくなりました。それなのに、一日一日をとても大切に生きて、口で筆をくわえ絵を描いたり詩を書いたりしてみえるのです。（これは星野さんの本です。）できる事がとても限られている世界で生きてみえるのに、その中で生きがいを持ち輝いて、生活してみえる星野さんを私は、とてもスゴイと思いました。同じ頃、車イスバスケットを活ようしてみえる障害の方を見ました。障害者とは、思えないくらい元気で生き生きしていました。私だったら車イス生活にたえれなくなると思います。私も、星野さんや車イスバスケの人達のように一日一日を大切に、一生けん命、がんばって生きていかなくてはって思いで、いっぱいになりました。自分の心を大きく成長させてくれた「福祉活動」これからも私の心をより向上させるためどんどん福祉活動に参加していきたいです。

ワークキャンプを体験して

河合小学校六年
松井　千恵

私は、今年の夏休みに河合町のすこやか館で行われた二日間のワークキャンプに参加しました。

今日は、その時の様子を紹介しながら、体験を通して感じたことや考えたことをまとめて発表したいと思います。

ワークキャンプの一日目は、体の不自由な人の大変さを少しでも体験してみようということから始まりました。

まず、車椅子の体験をしました。車椅子では、少しの段差があるだけで動けなくなったりしました。また、坂になったところを行くときには、転んでしまいそうな気がしてとても怖かったです。

車椅子を介助する体験では、段差で動けなくなって困っているときに、声を掛けてから介助することが大事だということを初めて知りました。ただ押せばいいというだけでなく、ちゃんとやり方があるということを知りました。

次に、聴覚障害の体験では、言葉を使わないで手で文字を書いて相手に伝える伝言ゲームをしました。言葉以外の方法では、簡単に人に伝えることができないということがよく分かりました。

視覚障害の体験では、アイマスクをつけ、スティックを持って歩きました。階段や段差があるところを歩くとき、どこで下りるのか分からなくてとても怖かったです。そして、歩いているうちに、自分がどちらに進んでいるのか分からなくなり、とても不安な気持ちになりました。

二日目には、デイサービスでボランティア体験をしました。

デイサービスでは、お茶やおやつの時間の手伝いをしたり、お風呂から上がられた方の髪の毛を乾かしたり、リハビリのための、ぬり絵も一緒にやったりしました。そうした中で、お茶の時間一つを取ってみても、飲み込むことが難しい方の飲みやすくする工夫や、手作りのおやつだったことが驚きました。また、髪の毛を乾かすのにもいろいろ気をつけなければならないことがあって、自分の時と違って難しいことだということが分かりました。

私は、このワークキャンプに参加して、初めて知ったことや勉強になったことがたくさんありました。そして、いろいろなことを考えるようになりました。

まず一つ目に考えたことは、私の住んでいる河合町は、体の不自由な方々にとって、生活しやすく、住みやすい環境になっているだろうかということです。河合町は、道はばがせまかったり、坂道や段差があったりして、安心して散歩できるようなところが少ないように思います。もっと体の不自由な方々が住みやすく生活しやすくなるような環境整備が必要だと思います。

次に考えたことは、体の不自由な方々が気軽に集まって、話をしたり、運動したり、リハビリをしたり、のんびりできる「すこやか館」のような施設や場所がもっとあるといいなということです。そういうところが増えれば、家以外のところでも、気軽に気分転換をすることができると思います。

そうした施設ができると、そこで働く人も必要になってきます。そこで、河合町の中からボランティアを募集して施設の運営を行っていけないかと思います。

そのためには、ボランティアを養成したり、体の不自由な方の介護の仕方を勉強したりすることが必要になってくると思います。

ワークキャンプなどの行事をたくさん開いたり、ボランティア団体を作ったりして、町中の人が、体の不自由な方々のことを理解し、町中のみんなが介助の方法を知って、いつでもボランティアができる町になってほしいと思います。

ワークキャンプに参加して、一番心に残っていることは、すこやか館の利用者の方と職員のみなさんとの心のつながりということです。体の不自由な方やお年寄りが、全てを職員の方に任せて、頼り切ってみえるようでした。また、それに対して、職員のみなさんも自分の家族のように優しく丁寧に接してみえました。

今回のワークキャンプの体験を通して、相手の身や立場になって考えることや行動するということがとっても大切で、しかも、とっても難しいことなんだということが学べたような気がします。

私は、将来、保育士か介護福祉士になりたいという夢を持っています。

これからも、ワークキャンプに積極的に参加し、いろいろな人たちとの触れ合いの中で、人との接し方をたくさん学んでいきたいと思います。

私たちにできること

宮川小学校六年
岩佐　祐美

私たちがつくりあげていくもの

私は手話を習っています。

私の住んでいる宮川には、耳の不自由な昴汰さんがいます。

昴汰さんは岐阜のろう学校へ通っています。休みになると私の学校に遊びに来てくれたり、行事で交流したりしています。ふだん不自由な人とあまりかかわらない私達だけど、昴汰さんに話しかけたり、遊んだりします。私は、昴汰さんのお母さんに誘われて、五年生の時から家族といっしょに手話を習い始めました。

習い始めて一年以上たった今年の夏、保健センターでサマーキャンプが行われることを知りました。実際にからだの不自由な人とあまりかかわったことがなかった私は、体験してみるといろいろなことがわかると思い、参加することに決めました。

七月二十六日、この日私は近くの保健センターで体験学習をしました。

目の不自由さを体験する学習では、アイマスクで目をかくして物をさわることをやりました。初めて知ったことは、目の不自由な人のために周りの物が工夫されているということです。お金は重さや形でわかるようになっています。シャンプー・リンスは横にぽつぽつがついていてさわって区別できるようになっています。

耳の不自由さを体験する学習では、耳せんをつけてどれだけ不便か考えました。考えてみると何も聞こえません。でもそれには手話があり、話がわかります。

足の不自由さを体験する学習では、車いすに乗っていろんな場所に行きました。歩くことがむずかしい人も車いすで動けてとても便利です。

八月二日、今度はお年寄りのお世話をする体験をしました。つくえには大きな紙があってそれをみんながおり紙でちぎり絵をしたり、ぬり絵をやったりしていました。ここで私はこれが手や脳の運動のためにやっていることを知りました。

次はみんなお風呂に入りました。ここでの私の仕事はおばあちゃんのかみの毛をかわかしたり、といたりすることです。かわかす所で難しかったのは温度の調節で、熱くないか冷たくないかに気をつけてやりました。かみの毛をとく所で強くとかさず、やさしくとくように気をつけました。それが終わるとみんなは「ありがとう」と言ってくれてとてもうれしくなりました。

その後は、みんなでゲームをやりました。ボールを使って遊んだり、ぼうを使って体操をしたりしました。みんな上手で楽しそうでした。

私はこの二日間の体験を通して、からだの不自由な人は、いろんな工夫がされた物に支えられて暮らしていることを知りました。物だけでなく、人の力も支えになると感じました。これからも私ができることはしたり、困っている人を見たら手伝ったりできればいいです。

十月二十日、台風二十三号で宮川も大変なことになりました。鉄橋や道がくずれて通れなくて、会えなくなった人もいました。

台風が起きて何日かたってから担任の伊藤先生が一番大変なことになった学校の近くの岸奥という所をゴミ拾いする計画を立てて、私達で拾いに行きました。家が水につかった所もあったし、がけがくずれて木がたおれている所もありました。ごみを取る時は、ガードレールにからまっている木の枝のごみを取ったり、道に落ちているたくさんのごみを拾ったりしました。みんながんばって拾っていました。

今、私の学校では毎週火曜日にみんなでごみ拾いをしています。私は「私の町にはごみはない」と思っていたけど、こうやって探してみるとごみがすごく捨ててあってびっくりしました。でもこのごみは宮川の人が捨てるだけじゃなくて、いろんな所から来て捨てていく人もいます。私の家の前で、トラックの運転手がごみを捨てていくのを見ます。

ごみを捨てることをみなさんはどう思いますか。

私は人間がごみを捨てるから空気や土、水が汚れ、植物や実がなくなり、動物の生きる場所がなくなって自然がこわれるのだと思います。

この一年間私はいろんなことを知りました。その中で、私はだれにとっても住みよい社会をつくる大切さを知りました。からだの不自由な人にかわり、みんな同じように生きられるバリアフリーの社会、そして自分の生きる場所や環境を大切にできる社会を力を合わせてみんなでつくっていきたいです。

私もこのことをいつまでも大切にしていきます。

ボランティアへの思い

古川中学校三年
上道　紗希

みなさんはボランティアについてどう思いますか。私が思うボランティアとは、人と人とをつなぐ大切な役割を果たすものだと思っています。しかし、私がこう思い始めたのはつい最近です。まず最初に私がボランティアについて

こう思うようになったきっかけを話したいと思います。

私は以前、ボランティアは何てめんどくさい事なんだろう。そう思っていました。しかし、何気なく行ったボランティア活動をきっかけに、私のボランティアに対する思いが変わりました。実際に行ったのは給食サービスや寿楽苑へ訪問したりしました。ただ参加しただけで、何かの目的を持ってボランティアをしたのではなく興味本意でした。しかし、いざやってみるととても楽しくて、すがすがしい気持ちになりました。こんなに楽しい事なら、もっと前から進んで参加していれば良かったなと思いました。この事がきっかけで私のボランティアに対しての思いが変わりました。

ちょうどその頃、同じような思いを持った友達から「社会福祉士」について聞きました。どんな仕事をする職業なのかわからなかった私は、中学校へ入学しても総合学習の時間に福祉について調べて、社会福祉士について理解する一つの手にしようと思いました。

そして、中学校でも福祉について調べてみて、小学校では調べる事が出来なかった事が中学校では調べる事が出来て沢山の事を知れて福祉の知識が増えました。

二年生の名古屋研修や職場体験でも、もちろん福祉関係の施設へ行き、いろいろ勉強させていただきました。職場体験では実際に老人ホームで、お年寄りの食事の手伝いや、お風呂の手伝いをさせていただきました。ほんのわずかの仕事をさせてもらっただけでしたが、すごく大変でした。しかし、お年寄りの看護をしている方達はもっと大変な思いをしているのを知って、すごいなと思ったし、この仕事にやりがいをもっている方達にあこがれを感じました。私も将来こんな風に仕事をやりがいをもって出来る人になりたいです。

私はこの時に社会福祉士になろうと決心しました。しかし、インターネットなどで社会福祉士について調べてみると、私が考えていた以上に大変でした。そこで私は沢山の過程を終了するにあたって少しでも役に立てれる事がないかと考えました。私なりに考えた案は「手話・点字」を覚えて資格を取る事でした。手話の本を買ったりして一生懸命、勉強しました。しかし、そんなに簡単な事ではありませんでした。どんなに勉強しても、なかなか頭に入らず苦労しました。そんな時、私は学校の意見作文発表会でクラスの代表として発表する事になりました。そこで私は、良い機会なので発表する時に手話を用いてみようと思いました。そして当日、必死に覚えた手話を用いて自分の思いを精一杯語りました。聞いてくれた人は、私の思いをどうとらえたのかわからないけど、私なりには自分の思いを沢山の人に伝える事が出来たので良かったです。とても貴重な体験ができました。これを機にこれからも、手話や点字を覚えて活用していけると良いです。

学校生活でもこれは同じです。私は、全校のみんなにボランティアの大切さを知ってもらえるように、前期福祉委員長に立候補しました。古川中学校をボランティアが盛んな学校にするために「一人一人ボランティア」をモットーに頑張ってきました。その結果が出たのか沢山の人の協力のおかげで、昨年より百人以上もボランティアに参加してくれる人が増えました。やっぱり、こうやって結果として表れてくれると、とても嬉しいです。委員長に立候補して良かったって思えるし、ほこりに感じます。

今、現在に至るまで、いろいろなボランティア活動に参加してきましたが、どれも自分から進んでボランティアをした事に意味があります。人から「これやって」とか言われて、イヤイヤやるのではボランティアではありません。あくまでも、自分から進んでやる事に意味があります。しかし、ボランティアをする事に対して「大変だ」とか「めんどくさい」とか思っている人はきっといると思います。でも、ボランティアというものはあたり前の事です。ほんのささいな事でも相手のためにあるいは自分のために何かする事は立派なボランティアです。そこで、これからボランティアをしていくにあたって忘れてほしくないのが、自分の気持ちを大切にする事です。ボランティアを難しいものだととらえすぎず、トイレのスリッパをそろえたり、ゴミを拾うだけでも立派なボランティアだという事を理解してもらい、これからの生活の中で行っていければなによりだと思います。私も今まで以上にボランティア活動に参加して、自分の将来のために頑張っていきたいです。

ボランティアと私

河合中学校三年　掘脇　美紀

河合町にある健康福祉センターすこやか館へボランティアに行ったとき、「あんた、エツさんの孫かな？」と、一人のおばあちゃんから聞かれました。私の祖母は、すこやか館のデイサービスを受けているので、顔見知りのようでした。お年寄りと何を話していいのか分からなかった私は、この言葉をかけていただき少し安心し、それからの会話は普通にできるようになりました。

私の祖母は二年ほど前から、車イスの生活をしていま

す。私もよくトイレに連れていってあげます。そんな時、祖母に「いつも、ありがとう」と言われると、すごくうれしい気持ちになります。すこやか館へボランテイアに行った時も、お年寄りの方に何かをしてあげたあと「ありがとう」と言われて、とてもうれしかったことを覚えています。

そして、お年寄りの方と、刺しゅうやちぎり絵、畑仕事をするのは、私にとってとても楽しいことです。お年寄りの笑顔を見ていると、私もうれしくなります。

ボランテイアをしてみて、お年寄りの方と接するのは楽しいことだけど、大きめの声で話すことが大事だということが、わかりました。すこやか館で働いてみえる介護福祉士の方にお話を聞いてみると、「大変だけど、やりがいがある」と言ってみえました。

ボランテイアをする上で、私が一番大切だと思ったのは、「笑顔で接する」ということです。「笑顔で相手の目を見て話すことで、お互いの距離が縮まると思います。それから、助けてあげたい、役に立ちたいという気持ちも必要かもしれませんが、それよりも、お年寄りから何かを学ぼうという気持ちの方が大切だと感じました。

私の夢は、介護福祉関係の仕事に就くことです。この仕事に就いて、少しでも多くのお年寄りと接し、お年寄りが安心して暮らせる町や市にしたいと思います。

交流を通して学んだこと

宮川中学校三年　谷口　翔太

「ありがとう。」

声をかけられ、私は達成感と喜びで胸がいっぱいになりました。その一言があるまで、お年寄りを正面から見つめることができなかったからでした。

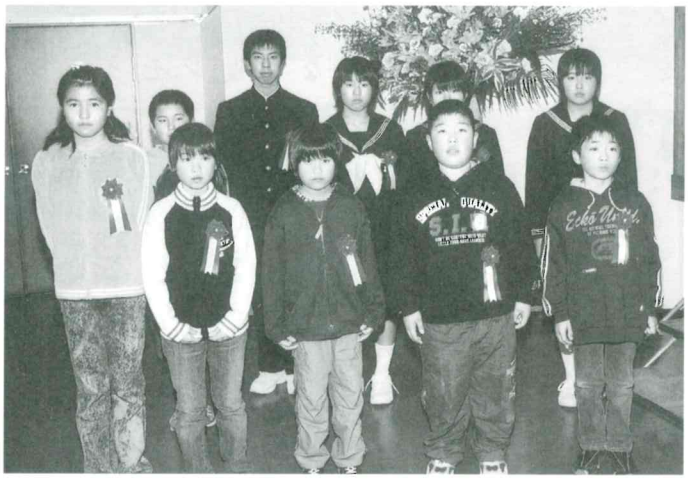
今年七月、生徒会主催のボランテイア活動の一環として、お年寄りとの交流会が設けられた時のことです。

私は緊張と不安の中、この会に参加しました。お年寄りとのふれ合いの中で、「失礼なことを、ついつい言ってしまうのではないか。」どんな話題について話し合えばよいか、などたくさんの不安がありました。しかし、実際に話してみると、会話もはずみ、私の心の中にあった不安や緊張は、どこかへ消えてしまい、気軽に親しみ合うことができました。会話がはずみ、多くのお年寄りの幸せそうな顔をみて、この活動をやれたことの満足感にひたることができました。そんな楽しい時もつかの間、お別れのときをむかえました。

「ありがとうな。また来てな。」と、どこかさみしさのこもった声で見送って下さったお年寄りの姿が、今でも心の中に深く残っています。

この会を通して、私はたくさんの大切なことを学んだり、私自身を見つめなおすことができました。

あるおばあちゃんと話をしているとき、しみじみと人生話をして下さいました。それは、歌を歌うことがとても大好きな方で、毎週日曜日には、NHK放送の「のどじまん」を観られているそうです。「一曲歌いましょう」と歌っていたおばあちゃん、毎日この施設で歌ったり、話したりすることが本当に楽しいみたいです。



なんだか、前向きに生きようとするおばあちゃんの姿を見て、元気づけられた気がします。私もおばあちゃんに、部活の剣道の話や将来の夢のことを話すと、「そうか、そうか。」と本当の孫のように聞いてくれました。

おばあちゃんは、「人生どんなこともあるけど、明るく楽しく生きなさいよ。」とあたたかい声をかけて下さり、お年寄りの方が大好きになりました。世の中には、まだたくさんのお年寄りについての問題があると思います。

私自身も反省する点があります。それは、私の祖父や祖母に対しての今までの態度です。私はすれちがうたびに、普通にかわすあいさつさえも、無視する心のない態度をとったり、自分の都合や気分に合わせて態度を変えたりすることです。今思えば、とても情けなかったことと反省をしています。

まわりにも私のように、お年寄りをじゃまものあつかいしたり、テレビ番組でも目にするお年寄りの方への失礼な接し方です。

お年寄りの方のほうが、私たちより長い人生を生きてみえたというのに、まるでお年寄りをばかにしたような、もっとくわしく言えば、赤ちゃんに使うような言葉を使っている人に、私は疑問を感じます。

今こうやって、すばらしい豊かな生活が成り立っている

のも、平和であるのも、お年寄りの努力があったからだと私は思います。

私たちは、お年寄りに対してどんなことができるのでしょうか？共に生きていくためには、どんなことが必要なんでしょう？なかなか答えは出てこないと思います。

しかし、一つだけ言えることは、お年寄りを大切にしていくという心を持つことだと思います。

そのことが明るい将来を築き上げる上で、重要になってくると思います。これからも私は、その心を持ってお年寄りとたくさん関わっていき、共に生きて生きたいと思います。

身近なところに

古川中学校三年　柴田　麻希子

私は、ボランティアがこんな身近にあるなんて知りませんでした。

私の初めてのボランティアは、小学校の時に行ったゴミ拾いや、ベルマーク集めだと思っていましたが、よく考えてみると私のボランティア活動は、三歳から始まっていました。

私は、三歳から琴を習っています。琴を習っているなかで老人ホームや公共施設などで演奏してきました。あの頃は、何も考えてなかったけど、今思うとあれも一つのボランティアだったと思います。私の中で琴を演奏することはとても身近な事であり、あたりまえのことでした。そんなあたり前に感じていたものがボランティアだったなんてすごくおどろきました。そして、おどろきと同時に自分のまわりには、当たり前に感じているけどボランティアになっているものが他にもあるのではないだろうかと思いました。私達は、生活するなかでいくつものボランティアをしていると思います。例えば、一般的にバスでお年寄りの方に席をゆずる。これは、立派なボランティアと言えます。そして、どこへ行ってもトイレに入ったらスリッパをそろえると思います。それもまた一つのボランティアであると言えます。他にもたくさんあると思います。自分にとっては、当たり前のことが、された方にとってはボランティアであるかもしれません。

私達は、普段の生活の中でしているボランティアに対する気持ちは、徐々に薄くなっていると思います。

それは、ボランティアという言葉の意味を難しくとらえてしまっているからではないでしょうか。私も前はそうでした。ボランティアは、お年寄りのために何かしたり、人のためになることであると思っていました。それは、小さなことではなく大きなことだと思い込んでいました。

しかし私は、それは大きな間違いだと気付けました。それは、学校内でのボランティア企画に参加した時です。その時に、私は、自分がボランティア活動がどんなものか勘違いし、今までの中にボランティア活動が含まれているなんてわかっておらず、これもボランティアだと言われて、参加してみようかな程度の気持ちで、お手紙ボランティアに参加したのですが、お年寄りの方から、返事が返って来た時に、とても嬉しさを感じました。

この時に、ボランティアをしたのは私の方だったのに、なんだか私がボランティアをされたような気がしました。

私が手紙を送った方も同じ気持ちだったかと思うと、またうれしさがこみ上げてきました。私は、この気持ちを忘れないと思います。そして、他の人にもこの気持ちを知って欲しいです。私にボランティアは決して難しかったり、大小なんて無いと気付かせてくれたように、きっと経験した人にも気付かせてくれると思います。

今私は、学校で福祉委員会の委員長をやっています。もともと、福祉というものをあまり経験してない私は、さっき話したように、私が感じた気持ちをまずは学校の生徒のみんなに感じてもらいたいという気持ちで福祉委員長になりました。

私は、絶対に少しでもたくさんの人に気付いてもらえるようにがんばりたいと思います。

最後に一つ、ボランティアは難しくありません。ボランティアは心であり気持ちであるということを忘れないで下さい。

編集後記

福祉体験をすることで、たとえば、「差別はいけない」ということをことばや説明で話しても、建前としての理解にしかなりません。体験をすることで、相手の気持ちを理解し、気づきが生まれ行動につながっていくのではないでしょうか、また、いろいろなボランティア活動を経験する中で、自分自身を見つめていくことができるのではないかと思います。このような活動を行う上で、各学校の先生、ボランティア団体、父兄、福祉施設の関係者の方々のご理解とご協力をいただき大変、感謝いたしております。福祉協力校の生徒と共に福祉について学ぶことで私自身もいろいろな面で勉強になり、ひとりでも多くの生徒が福祉について関心をいだいてくれれば、ありがたいと思っています。

今回の福祉協力校だよりに載っている生徒の意見を大切にして、今後の福祉協力校の活動に、地域の方々と連携しながら、推進していきたいと思っています。